

古高ドイツ語「タツィアーン」研究の新展開

—「ディアテッサロン」あるいは「ハルモニー」—

福本 義憲

I

古高ドイツ語「文学」のもっとも重要な作品のひとつとして、古高ドイツ語「タツィアーン」があげられる。Rathofer の言い方を借りれば、「タツィアーンはドイツ語の最初期文献のなかでも最大の規模をもつだけでなく、さまざまな観点から見て、もっとも重要な散文学遺産 (Prosadenkmal)」²である。「古高ドイツ語文学」(Althochdeutsche Literatur) という場合、Sonderegger が今や古高ドイツ語入門の古典となった著書³の中で述べているように、「文学」の概念が、(中高ドイツ語文学以降の、近代も含めての)「文学」とは異なり、内容的にも形式的にもはるかに広範な領域に適用される。8世紀後半から11世紀初頭までの初期ドイツ語(つまり、古高ドイツ語)のすべての言語遺産がこの「文学」に含まれるのである。「古高ドイツ語文学とは、初期の手探りの文学であり、しかも変革期の文学であり、言語的にはまだ粗い土塊に取り囲まれ、その後世への影響は、個々の遺産の内容よりも、そこで生み出された言語的手段の中にある」⁴。この手探り状態の言語的手段には、いくつかの数少ない文学的作品⁵とならんで、翻訳文学において欄外注解・語釈集 (Glossen)、行間翻訳 (Interlinearversionen) を始めとして、多様で豊かな文学形式が存在した⁶。

¹ Meineke / Schwerdt 2001, S.135-165 は古高ドイツ語の Die größeren Textdenkmäler として 6 つの作品 (群) をあげている。1. Der ahd. Isidor und die Monsee-Wiener Fragmente, 2. Die ahd. Benediktinerregel, 3. Der ahd. Tatian, 4. Otfrids Evangelienbuch, 5. Die Werke Notkers von St. Gallen, 6. Willirams Paraphrase des Hohen Liedes. 5 と 6 は 10 世紀後半に属する。Otfrid は 9 世紀後半の韻文作品である。

² Rathofer 1973a, S. 256; Betten 1987, S.395; Masser 1997, S.123.

³ Sonderegger 2003, S.49. 初版は 1974, S.46.

⁴ Sonderegger 2003, S.50.

⁵ 例えば Das Hildebrandslied, Otfrids Evangelienbuch, das Ludwigslied など。

⁶ Sonderegger 2003, Formen der Übersetzungsliteratur. S.120-144.

こうした草創期の文学、いわば「途上の文学」の流れの中に、ラテン語からドイツ語への翻訳文学としての古高ドイツ語「タツィアーン」は位置づけられるのだが⁷、その独特の翻訳形式は一世紀以上にわたる古高ドイツ語文学研究においても正当に認識されてこなかった。この問題は Sievers による「タツィアーン」古写本の編纂 (Edition)⁸の問題、ないしは校訂の問題であるが、本稿ではこれを「統語的問題」としてとりあげることになる。

古高ドイツ語の文学史において一般に「タツィアーン」(以下 Tatian)と呼ばれている書物は、ザンクト・ガレン修道院付属図書館に9世紀中頃ないし後半期から伝承されている古写本 (Codex Sangallensis 56、写本 G) である⁹。この写本の内容は、イエスの生涯を四福音書正典 (Kanon)、すなわちマタイ、マルコ、ルカによる三つの共観福音書 (Synoptiker)、およびヨハネ福音書の文言を組み合わせ、四福音書相互の矛盾する記述を整理して、一貫した統一的(すなわち調和的)な物語として書き綴ったものである。この福音書形式は伝統的にギリシア語の「ディアテッサロン」(διατεσσάρων, Diatessaron)¹⁰、あるいは「調和福音書」(Evangelienharmonie)¹¹と呼ばれている。本稿では、「統語的問題」(校訂問題)ならんで、この「ディアテッサロン研究」と原本問題 (Vorlagenproblem) とを関連づける研究領域を、新たな展開を辿ることになった「原本問題」としてとりあげることにする。

II

古高ドイツ語 Tatian については、中世初期の(とくに作者不明の)作品においてよく論じられるように、書かれた言語(方言)、書記方言と関わる成立場所、成立時期、作者(翻訳者)・筆記者、文学形式、編纂(および校訂)、原本もし

⁷ Ehrismann 1932, S.286ff.; de Boor 1949, S.43ff.

⁸ Sievers 1872, Tatian. 1. Ausgabe; Sievers 1892, Tatian. 2. Ausgabe およびほぼ百年後の Masser による Tatian 校訂版. Masser 1994: Die lateinisch-althochdeutsche Tatianbilingue. Stiftsbibliothek St.Gallen Cod. 56.

⁹ Masser 1994, S.27によれば、56という番号は、1755年に行われた図書整理の際に修道院図書館司書 Pius Kolb によって付された。伝統的な Tatian 研究では、St. Gallen の G から写本 G (Handschrift G) と呼ばれる。

¹⁰ διατεσσάρων とは「四つを通して」の意味である。Petersen 1994, S.35f.によれば、この語を最初に用いたのは Eusebios/Eusebius (4世紀前半)。Unum ex quattuor (四つから一つ)とも呼ばれる。Diatessaron は「ディアテッサロン研究」で用いられることが多い(後述参照)。

¹¹ Hörner 2000, S. 26f.は Evangelienharmonie を原則として正典福音書に現れる文言のみを用いて書かれたイエス伝と定義している。Otfrid の Evangelienbuch や古ザクセン語の Heliand は Evangelien-dichtung (福音書文芸作品)として区別される。この意味では Tatian は古高ドイツ語文学では唯一のものである。de Boor 1949, S.47f.

くは原典問題といった、古写本に特有の諸問題が存在している。さきに述べたように、本稿ではこのうち校訂問題と原本問題に焦点を当てるが、いうまでもなく、これらの諸問題は程度の差こそあれ互いに関連しあっている。

古高ドイツ語 Tatian の言語は、Sievers による詳細な研究¹²から、東フランケン方言 (Ostfränkisch) と位置付けられている。これは今日までの Tatian 研究の基本的な認識である¹³。子音は高地子音推移を経た音が多いが、現れる位置によって推移途中の音、未推移の音が混在している¹⁴。東フランケン方言の確定から、写本の成立場所としてフルダ (Fulda) の修道院を推定することはほぼ必然である¹⁵。ザンクト・ガレン写本の筆写には 7 名の筆記者 (ギリシア語文字で区別される) が参加していたことが明らかにされている¹⁶。筆記者の担当部分は Sievers 版の章をあげるのが慣例だが、ここでは Masser の新校訂版¹⁷の頁による担当部分を紹介しておこう。

α S.25 bis S.51; β S.52 bis S.124, Zeile 6; γ S.124, Zeile 7 bis S.164;
δ S.165 bis 195; α' S.196 bis 216, Zeile 15; ε S.216, Zeile 16 bis S.220;
β' S.221, Zeile 1 bis Zeile 22 (lat); ζ S.221, Zeile 22 (ahd.) bis S.320;
δ' S.321 bis S.342, Zeile 19, Textende.¹⁸

この筆記者と翻訳者をめぐっては、Steinmeyer による Sievers 1872 年版 Tatian の書評の以来、議論が重ねられてきた¹⁹。とりわけ Baesecke は、γ に Walafrid Strabo (808/809-849) を、ζ に 822 年から 842 年までフルダ修道院院長を務めた Hrabanus Maurus (780-858) を筆記者と同時に翻訳者と見なしている²⁰。フルダ修道院学校を Tatian 翻訳の揺籃地とし²¹、Hrabanus

¹² Sievers 1870, Untersuchungen; Sievers 1872, Tatian. 1. Ausgabe.; Sievers 1892, Tatian. 2. Ausgabe. Sievers 1870 は筆記者によって異なる表記の音韻分析が中心であり、この研究が Tatian 第 1 版、第 2 版の Einleitung のほとんどを占めている。

¹³ Sonderegger 2003, S.128. Sonderegger はこの音韻・文法の新旧形の混在する特徴も含めて、Tatian の言語を Normalalthochdeutsch と呼んでいる。

¹⁴ Ehrismann 1966, S.288.

¹⁵ Sievers 1892, S.XIII, XII. Sievers が Fulda を成立場所とするのは言語的な理由からのみである。フルダ修道院、Bonifatius、Hrabanus Maurus については、後述を参照。

¹⁶ Sievers 1892, S.XII; Baesecke 1948, S. 17; Masser 1994, S.31. 古文書学 (Paläographie) からの知見も同じ結果を示している。Meineke/Schwerdt 2001, S.147. 以下の注 18 参照。

¹⁷ Masser 1994: Die lateinisch-althochdeutsche Tatianbilingue. S.31.

¹⁸ Masser 1994, S.31. Lage (帖) の表示は省略した。Sievers 1892, S.XII によれば、ζ が本文全体の校正を行った。なお、写本の 1 頁から 24 頁 (Praefatio, Kanontafel, Kapiteln) は 7 人目の筆記者による (上記 6 名とは異なった筆跡をもつという)。

¹⁹ Steinmeyer 1873, S.474ff.

²⁰ Baesecke 1966, S.15f.; Baesecke 1948, S.23f. de Boor 1949, S.49 も Walafrid Strabo が Tatian の翻訳に関わった可能性を見ているが、Walafrid は 826 年に Fulda に行き 829

MaurusをTatian翻訳の奨励者とするのは伝統的な捉え方であるが、Hrabanus自身が筆記者あるいは翻訳者として参加していたかどうかについては、いまだ解明されていない²²。この問題はTatianの成立時期とも関わっている。Sievers以来、ザンクト・ガレン写本は830年頃の成立とされてきた²³。Sieversの校訂版はその注解(Apparat)を参照していくと、校正者によって消去されて訂正された字句の以前の形を読み取り、それを再現するという方針のように見える。この場合には、古形もしくはフランケン方言で一般的ではない方が採用されている。だがその一方で、修正された語形が採用されている場合も少なくない。

冒頭部分から Sievers によって校訂されたいくつかの例を見てみると、(Apparat 以下 App) 1. 4. *bigriffun: bigriffum r zu n*, 1. 2. *in allem: (App) allem r zu n*, 1. 5. *thie engil: (App), thie rc zu er* のようになっている。1. 4. の場合には古形 *bigriffum*ではなく、校正された *bigriffun*が採用されているが、他の2例では消去された語形(古形)が復元されている。3. 2. *thie engil: (App) thie rc in er* となっているが、すぐ下の3. 3.では *Quad iru ther engil: (App) ther rc* となっていて、どちらも校正されているのに(*rc*は写本校正者による消去)一方では(古ザクセン語に近い)古形 *thie*が、もう一方では新しい語形 *ther*が採用されている²⁴。全体として見ると、消去された古形が復元されて採用されている場合が圧倒的に多い。これは Sievers の時代の古音(古方言)の復元を重視した校訂方針であるが、結果として Sievers の校訂版が実際の写本よりも古い時代のものと印象づけることになった²⁵。このいわば復元された成立時期時が Sievers のいう830年頃ということになる。今日の知見では、当時の校正者によって最終校正(第二の校正者)²⁶されてサンガレンシク古写本としてフルダ修道院で完成したのは、9世紀中頃とされている²⁷。

さて、すでに述べたように、このザンクト・ガレン古写本を19世紀後半の学術的規範にしたがって校訂刊行したのは Sievers であり、著名な文献学者であった Sievers の版(1892年第2版)がそれ以降のTatian研究の規範とされて

年にはカール禿頭王の教育係として宮廷に戻ったと述べて、示唆するにとどめている。

²¹ de Boor 1949, S.45; Haubrichs 1988, S.260; Sonderegger 2003, S.128.

²² Masser 1994, S.33はTatianの成立時期を9世紀中頃と見て、この時期にはすでにフルダを去っていたHrabanの役割を疑問視している。Masser 1995, S.624.

²³ Sievers 1892, S.LXX; de Boor 1949, S.45; Ehrismann 1966, S.289.

²⁴ Braune/Eggers 1975, S.268. § 321a. *-um>-un*、および S.243. § 287. *Anm. a. thie/ther*.

²⁵ Steinmeyer 1873, S.473は初版の書評においてすでにこの点を指摘している。

²⁶ Sievers 1892, S.XIIのいう *ein zweiter Corrector* である。

²⁷ Masser 1994, S.34はこの成立時期についてさらにいくつかの傍証をあげている。Sonderegger 2003, S.128には *gegen 850* とある。

きたのである²⁸。「この Sievers 版の絶対的な信頼性については、(...) 今日までいささかの疑問も表明されなかった」²⁹。Sievers は 1892 年版の *Einleitung* において写本 G の段組み形式について、彼自身の版では省略しているエウセビウス正典対照表³⁰に触れたあと、写本は「181 章の表題 (*Capitel*) のあとに、25 頁から 342 頁まで同様に二段組の左段に調和福音書のラテン語テキスト、そして右段にドイツ語テキストを含んでいる」と記している³¹。Sievers の版はまさしくこの形式をとっているため、この配置については「いささかの疑問も表明されなかった」(Rathofer) のである。ところが 1994 年に刊行された Masser の *Tatian* 校訂版によって、この古写本は実際には逐行対訳形式 (*Bilingue*) であり、二段組みの左欄にラテン語文、右欄にはラテン語に正確に対応する行ごとの古高ドイツ語訳文が書かれていることが明らかになった³²。

III

Sievers 版の「左段にラテン語テキスト、右段にドイツ語テキストを配置する」という言葉は、Masser の表現にしたがえば、「間違いではないが、半分の真実でしかない。そして半分の真実とは、ときには完全な真実からきわめて遠く離れていることがある」³³。Sievers 版 (1892 年) からほぼ百年後の 1994 年になって、Masser は写本 *Codex 56* のきわめて厳密な照合と校訂にもとづいて、新たな *Tatian* の版を刊行した³⁴。写本 G のラテン語と古高ドイツ語のテキストの配置をそのままの移す形式で公刊され、今や *Tatianbilingue* (*Tatian* 対訳写本) と呼ばれるようになった新校訂版 *Tatian* によって、一方において Sievers 版の「いささかの疑問も抱かれなかった」テキストの配置についての問題 (統語的問題) と、もう一方では、Sievers が *Einleitung* において *Tatian* の名称を与える根拠としながら、写本 G のラテン語の原本 (*Vorlage*) とされる 6 世紀の *Victor von Capua* の写本 = 写本 F) に関連させて述べている問題とが、ともに解消さ

²⁸ Sievers 1892, *Tatian*. 2. Ausgabe.

²⁹ Rathofer 1972, S.337f.

³⁰ Rathofer の指摘によれば、この従来無視されてきた Eusebius の *Kanontafel* (正典対照表) が両写本に存在することは、写本 G のラテン語版 (*G^{lat}*) と Fulda の *Victor* 写本 (写本 F、または *Codex Bonifatianus 1* と呼ばれる) との一致を証明する重要な証拠のひとつとなった。Rathofer 1973a, S.266.

³¹ Sievers 1892, S.XI.

³² Masser 1994, S.28ff.

³³ Masser 1993, S.127.

³⁴ Masser 1994, *Die lateinisch-althochdeutsche Tatianbilingue*.

ることになったのである。Sieversはこのフルダ古写本³⁵が「すべての伝承されているラテン語 Tatian 写本の原典」であり、「ザンクト・ガレン古写本ときわめて緊密に接触している。わずかな逸脱は取るに足らぬものであり、ほとんど価値がない。(Tatian の) ドイツ語の方もまたラテン語のテキストに基本的には正確に、それぞれの翻訳者の能力に応じて、部分的には奴隸的なほど非ドイツ語的なやり方ではがっている。つまり、ドイツ語のテキストは隣にあるラテン語のテキストから実際に流れ出したものである(…)」³⁶と述べている。最初の校訂の問題を、テキスト配置(語順)の問題、言語的な捉え方でいえば「統語的問題」とすれば、後の原本の問題は写本 G のラテン語(Glat)および古高ドイツ語 Tatian の「原本問題」であり、この「原本問題」については、校訂問題とはまったく逆に、長く疑念が表明されてきたのである。

「原本問題」はディアテッサロン研究者 Anton Baumstark の論考を中心として、1930 年代に複雑な経緯を辿って展開された³⁷。Baesecke は従来のディアテッサロン研究を踏まえて、ザンクト・ガレン写本 (G) とフルダ写本 (F) のラテン語テキストも古高ドイツ語 Tatian の原テキストも、そのテキスト上の相違が未発見の古ラテン語原本 (*T^{lat}) に遡ると論じた³⁸。たとえば、ヨハネ福音書 1.13 の句では、

F non ex sanguinibus neque ex voluntate viri
 Glat non ex sanguinibus neque ex voluntate carnis neque ex voluntate viri
 Gahd nalles fon bluote noh fon fleiske luste noch fon gommanes uuillen
 となり、neque ex voluntate carnis の部分はフルダ写本 (F) ではなく、ザンクト・ガレン写本 (G) にはラテン語と古高ドイツ語がある (つまり F は G の原本ではない) ³⁹。また、ヨハネ福音書 1.10 の In mundo は、

F	In hoc mundo
G ^{lat}	In mundo
G ^{ahd}	In therro uueralti

となっているので、古高ドイツ語の *therro* は *Glat* の翻訳ではない (*Glat* は *Gahd* の原本ではない)。ここから *F*、*Glat*、*Gahd* はそれぞれ別の原本に遡ると結論す

³⁵ ただし Sievers が「フルダ古写本 (Codex Fuldensis)」と呼んでいるのは、実際には Ranke の編纂した校訂版写本 F である。Ranke, Ernst: Codex Fuldensis. 1868.

³⁶ Sievers 1892, S.XVIIIff.

³⁷ ディアテッサロン研究との関連での古高ドイツ語 Tatina 研究については Baumstark 1964; Rathofer 1972; Rathofer 1973ab; Petersen 1994 *pass.*; Kapfhammer 2014, S.16ff.

³⁸ Baesecke 1948, S.4.

³⁹ Baesecke 1949, 上掲箇所。

ることができる。だが、Baesecke はその著書の後半部において、マルコ福音書 14.44 の *tenete eum et ducite caute* の句で F、G^{lat}、G^{ahd} に *caute* がないが (ahd: *fahet inan inti leitet inan*)、G^{lat} には *eum* の上に第二校正者による *caute* という書き込みがある。つまり、G には *FG を超えるテキストが存在したことになる⁴⁰。さらに Baesecke は G^{ahd} (Tatian 114.1) の *sin uuahst luzil uuas* (*sein Wuchs war klein*) と G^{lat} の *statura illius pisillus erat* を比較し、このラテン語はドイツ人に典型的な間違いがあると指摘する⁴¹。つまり、G^{lat} はドイツ人によって書かれたものである。とすれば、G^{lat} と G^{ahd} は同じ間違いを含むので、原本関係が成立する。しかし G^{lat} にある *illius* は F にも *Vulgata* にもないので、この *illius* を含む *G^{lat} が存在したと推定できる。これは F とも別系統であり、これが *FG、すなわち古ラテン語「ディアテッサロン」と考えられる。この場合、「ラテン語・古高ドイツ語テキストからは古ラテン語 Tatian にも、もちろんシリア語の Tatian にも繋がる経路はない」⁴²。この考察によって Baesecke は G 写本を古ラテン語 Tatian (古ラテン語 Diatessaron) から切り離し、同時に F からも切り離したのである (*FG^{lat} の存在は否定しなかった)。

フルダ古写本 (F) は Codex Bonifatianus 1 と呼ばれ、ボニファティウス (672-754) がローマ滞在中に入手し、744 年のフルダ修道院創設に際してその図書館の蔵書に加えた書である⁴³。このフルダ写本は 546 年に Victor von Capua が古ラテン語写本を *Vulgata* に適合させて書き直したとされる Diatessaron 写本であり、これが西方での唯一の伝承とされる⁴⁴。この失われた古ラテン語 (*Vetus Latina*) の Diatessaron をめぐる研究は、とくに「ディアテッサロン研究」(*Diatessaronforschung*) と呼ばれる。その目標は西暦 170 年頃にシリア人 Tatianus によって著されたとされるシリア語 (もしくはギリシア語) Diatessaron 原典⁴⁵から訳された (と思われる) 古ラテン語 Diatessaron の復元である⁴⁶。古高ドイツ語 Tatian は、そのラテン語およびフルダ写本 (F) も含めて、この古ラテン語 Diatessaron の復元に貢献できると考えられたのである。その研究は写本 F と G とを切り離し、それぞれに異なる原本を想定し、そこから古ラテン語に遡及しようとする文献学的方法である。Rathofer は

⁴⁰ Baesecke 1949, S.15. Baesecke は校正者が記憶から補足した可能性を指摘している。

⁴¹ Baesecke 1949, S.16.

⁴² Baesecke 1949 上掲箇所。

⁴³ Martin 2000, S.8ff.; Haubrichs 1988, S.259; Meineke/Schwerdt 2001, S.144.

⁴⁴ Petersen 1994, S.84ff.

⁴⁵ シリア人 Tatianus については Petersen 1994, S.35-83.

⁴⁶ Baumstark 1964, S.5. Wissmann 1960, S.251. Ganz 1969, S.29.

Baumstark の研究を継承し、古高ドイツ語 Tatian や古ザクセン語 Heliand から古ラテン語 Diatessaron を復元しようと試みたのである⁴⁷。

だが、1970 年代になって Rathofer はザンクト・ガレン写本 G と写本 F を直接照合した結果、このふたつのラテン語写本の異同のほとんどが、Ranke (F) と Sievers (G) が編纂した際の誤記、および誤植によって生じた相違であることを明らかにした⁴⁸。さらに、従来の研究では無視されてきたエウセビウス (Eusebius) の Kanontafel (正典対照表) がほぼ完全な形で両写本に存在し、それに基づく欄外の参照数字さえも合致していたのである。これによって、写本 G のラテン語版 G^{lat} と Fulda の Victor 写本 F とが、その形式的な構成においても⁴⁹、正確に一致することが証明された。「この衝撃的な事実は、初期に抱かれたディアテッサロン研究の方法に対する信頼、古高ドイツ語 Tatian に関わる問題の解決に利用しようという信頼を堅固なものにすることには貢献できなかった」⁵⁰。この結果によって、Rathofer が「ディアテッサロン幻想」⁵¹と呼んだ「原本問題」は、少なくとも古高ドイツ語 Tatian の問題領域においては解消したのだった⁵²。

IV

Sievers 版テキストから生じた翻訳文の語順に関わる「統語的問題」とは、Sievers の Tatian がたしかに「左段にラテン語テキスト、右段に古高ドイツ語テキストを配置」したものだったが、その配置の方法が実際の写本の原理を完全に無視した構成であったことから生じた問題である。しかもこの事実気づくものはほとんどいなかった。「この配置についてはいささかの疑問も表明されなかった」⁵³。古写本 G は、たんに左段にラテン語テキスト、右段に古高ドイツ語テキストを配置しただけのものではなかった。ラテン語文の行ごとに厳密に対応させて、古高ドイツ語の訳文が配置されていたのである。

ザンクト・ガレン古写本は、カロリング朝ミヌスケルで書かれた、シンプル

⁴⁷ Rathofer 1964, Baumstark S. Xff. なお、失われた写本 B、およびその 17 世紀の写本 Ms. Junius 13 については Sievers 1892, S.XV, Ganz 1969, Rathofer 1973b, Flöer 1999.

⁴⁸ Rathofer 1973, S.266f.

⁴⁹ 形式的な一致だけでなく、Rathofer 1972 は写本間の字句の異同を合理的に説明した。

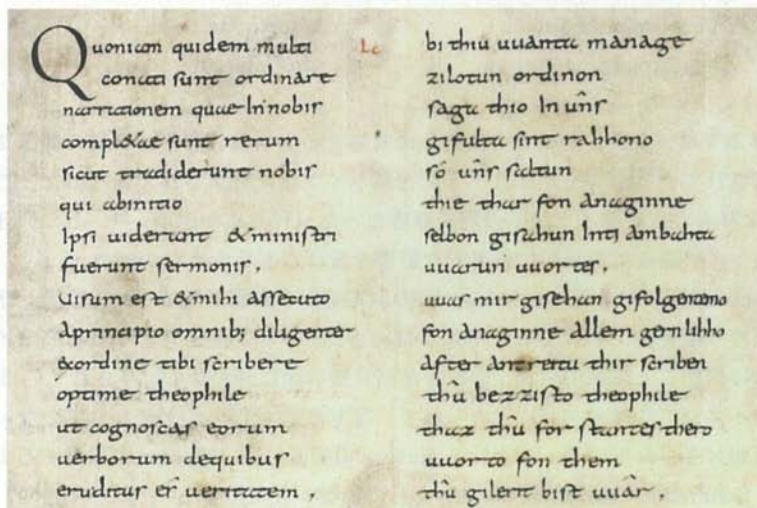
⁵⁰ Rathofer 上記箇所。Rathofer 1972, 1973a には具体的な検証結果がまとめてある。

⁵¹ „diatessaron imaginaire“ Rathofer 1973a, S.295.

⁵² Masser は Tatianbilingue の中で、Sievers 版に付された写本 F との相違が実際には存在しないものであり、これが Tatian 研究の領域において相当な混乱を惹き起したと述べている。Masser 1994, S.12f.

⁵³ Rathofer 1972, S.337f.

な美しさをもつ写本である⁵⁴。本文冒頭（25頁）の15行を見てみよう。



Masser によって 1994 年に公刊された新校訂版 Tatianbilingue は、古写本 G がきわめて忠実に再現されている⁵⁵。以下に冒頭部 15 行を転記しておこう。

Quoniam quidem multi
conati sunt ordinare
narrationem quae In nobis
compl&ae sunt rerum
sicut tradiderunt nobis
qui ab initio
Ipsi uiderant & ministri
fuerunt sermonis,
visum est & mihi assecuto
a principio omnibus diligenter
ex ordine tibi scribere

bithiu uuanta manage
zilotun ordinon
saga thio In ûns
gifulta sint rahhono
só ûns saltun
thie thar fon anaginne
selbon gisahun Inti ambahta
uuarun wörtes,
uuas mir gisehan gifolgentemo
fon anaginne allem gernlihho
after antreitu thir scriben

⁵⁴ <http://www.e-codices.unifr.ch/de/csg/0056/25/>

⁵⁵ Masser 1994, S.65. 9 行目の gisehan は Masser 版では gesehan となっているが、写本のとおりの gisehan とした。同 64 頁の注解には gisehan] -n < -m durch Rasur とある。

optime theophile	thû bezzisto theophile
ut cognoscas eorum	thaz thû forstantes thero
uerborum de quibus	uorto fon them
eruditus és ueritatem,	thû gilerit bist uuâr,

G 写本では、ラテン語の各行に完全に対応するように古高ドイツ語の翻訳文が配置されている。つまり、行ごとに古高ドイツ語に翻訳されていたのだ。これが G 写本の古高ドイツ語への翻訳原理だった（行対応の原理）⁵⁶。この原理は古高ドイツ語訳文の語順に根本的な影響を及ぼさざるをえなかった。

Sievers 版では、写本にはない PROLOGUS の表題が付けられ、ラテン語には「ルカ福音書」を表す *L.* と章節が付加され、ラテン語と対応する古高ドイツ語はほぼ節ごとに区切られ、節番号が福音書の節に合わせて付与されている⁵⁷。節のイニシアルは大文字に代えられて、写本 G にはほとんど使われていない句読点が付与されている。こうした Sievers の校訂には、Masser の指摘するように、Schmeller の編集した Tatian からの影響が見て取れる⁵⁸。

L. 1.1. Quoniam quidem
multi conati sunt ordinare nar-
rationem quae in nobis com-
pletæ sunt rerum,

2. Sicut tradiderunt nobis
qui ab initio ipsi viderant et
ministri fuerunt sermonis,

3. Visum est et mihi asse-
cuto a principio omnibus dili-
genter ex ordine tibi scribere,
optime Theosohile,

4. Ut cognoscas eorum ver-

1. Bithiu uuanta manage
zilotun ordinon saga thio in
ûns gifulta sint rahhono,

2. Só ûns saltun thie thar
fon anaginne selbon gisahun
inti ambahata uuarun uuortes,

3. Uuas mir gisehan gifol-
gentemo fon anaginne allem
gernlihho after antreitu thir
scriben, thû bezzisto Theophile,

4. Thaz thû forstantes thero

⁵⁶ Masser 1997, S.128; Kapfhammer 2014, S.72.

⁵⁷ Sievers 1892, S.13.

⁵⁸ Masser 1994, S.9; Schmeller 1841, S.1. PROLOGUS という表題も、福音書の章を節と文に区切って文頭に大文字を用いるテキスト構成も Schmeller 版から継承した (Schmeller 1841, S.1)。節の冒頭に大文字を採用したのは Ranke である (Ranke 1868, S.41ff.)。Codex Fuldensis はすべて Unzial (大文字) で書かれている。

borum de quibus eruditus es
veritatem.

uuorto fon them gilerit bist
uuâr.

G 写本では 15 行、Sievers 版では 14 行となり 1 行の違いだが、行の区切りが完全にずれている。古高ドイツ語翻訳の行対応原理は Sievers 版では完全に隠されてしまった。ここに Sievers の校訂問題は「統語的問題」となったのだ。

古高ドイツ語 Tatian がラテン語の行対応（逐行）の翻訳、つまり行単位の翻訳であることは、Masser のあげる次の例がよく示している⁵⁹。

T 223,5f (Siev. 132,16)

[...] Numquid & uultis discipuli [...] uuellet ir iungiron
eius fieri. sine uuesan

Sievers 版から *discipuli eius / iungiron sine* の行だけを取りだせば、*vultis discipuli eius fieri? / uuellet ir iungiron sine uuesan?* であり、ここからは *iungiron sine* がラテン語の語対応の逐語訳と解釈せざるをえない。だが、写本では *discipuli* の後に改行があることが分かれば、古高ドイツ語の語順が行対応原理にしたがった結果であると理解できる⁶⁰。行対応という翻訳原則を把握すれば、逐語翻訳あるいは非ドイツ語的といった理解とは異なった解釈の可能性が出てくる。先にあげた写本 G 冒頭部の例を用いれば、5 行目の

sicut tradiderunt nobis só ûns saltun

の関係詞 *sicut / sô*⁶¹ で始まる下位副文がドイツ語の語順 *ûns saltun* に置き換えられているのは行対応の中でのドイツ語への適応と解釈できる。9 行目の

visum est & mihi assecuto uuas mir gisehan gifolgentemo

では、*quoniam/bithiu uuanta* で導入される副文に、定形 (*uuas*) で始まる主文が続くドイツ語的な構文になっている⁶²。ラテン語の語順を *abcde* とすると、ドイツ語では *bdae* と大きく置き換えられ、比較的自然なドイツ語の語順が実現している⁶³。こうした統語的考察は、古高ドイツ語 Tatian が行対応翻訳であるという明確な認識に基づいてはじめて可能になるのである。

⁵⁹ Masser 1997, S.131. T は Masser 1994, Tatian を表す。Sievers 1892, S.194.

⁶⁰ これ以外の例については、Masser 1997, S.128ff. および Kapfhammer 2014, S.71ff.

⁶¹ Schrot 2004, S.168. 主語は次行の関係詞 *thie* であるが、行対応の原理上動かさない。

⁶² *visum est/uuas gisehan* は非人称構文「(するのがよいと) 思われた」。上位副文に接続する *et (daher auch)* の省略は、この主文の語順によって機能的に補填されている。

⁶³ *mir* と同格の現在分詞 *gifolgentemo* はラテン語的だが、形式所相動詞 *assequor* の完了分詞 *assecuto* を *folgên* に *gi-* を付した完了相の現在分詞に置き換えて「調査した」という完了的意味を表している。

Sievers は第二版(1892年)の改訂のときにも、ザンクト・ガレンに赴いてテキストの照合作業を行っている⁶⁴。第二版ではとりわけ Ranke 版の写本 F との異同の記述に重点をおいて⁶⁵、初版以上に詳細な文献学的な注解を施した。Schmeller 版から継承した福音書の編纂様式は変更しなかった。しかしながら、第二版を詳細にみれば、この段階において Sievers は Tatian の行構成のもつ特異性に気づいていたと思われる。第二版の Vorwort は 1872 年の初版の Vorwort とはまったく異なる内容になっている。そこでは、行構成に対して特別な注意が払われている。注解(Apparat)の記述法において、初版に比べてまったく新しい方針が示されている。とくに行分けの表示に新たな原則が導入されているのである。たとえば、縦線(|)によって行末が表され、さらに *z* の符号によって行そのものが示される。「*r* (Rasur を表す)の前におかれた *z* は削除が写本の一行全体に及ぶことを意味している」⁶⁶。*z* を含む注解はたとえば *misertus est | nō eis - uexati zrc* は *misertus est* が行末で校正者によって補足され(*n*)、次の行の *eis* から *uexati* までの行全体が、削除された行の上に書かれていることを表している(*s* は筆者、*c* は校正者を示す)。また、*compedibus - |; et - disruptisset zrs* は *compedibus* から行末まで解読不可能な文字が削除され、次の行全体が筆者によって削除された行に書かれていることを表している⁶⁷。この頁(S.IX)に付けられた唯一の注は、Tatian の行構成のもつ機能をかかなりの程度に説明している。「このような行削除を他の削除から区別することは、言語的に重要でないわけではない(nicht unwichtig)」といった表現のうちに、Tatian の行構成の校訂に Sievers が抱いた特別な関心、あるいは釈明のようなものが読み取れる。「このような行削除は、文段のより見易い外見を作り出すのを目的としている。それは、長く書きすぎた行を削除したり(…)、短すぎたり長すぎたりした行の均衡を図るために行われる」。1892年の第二版の段階では Sievers は Tatian の行分けの働きに注目していたと思われる。だが、写本校訂の伝統を継承しつつ、最新の文献学の成果として改訂するためには、この程度の示唆と注解の改編に留めざるをえなかったのであろう。

⁶⁴ Sievers 1892, S.VII. 「1890年の秋」と記されている。

⁶⁵ これが「ディアテッサロン研究」に多くの問題を惹き起こしたことはすでに述べた。

⁶⁶ Sievers 1892, S.IX.

⁶⁷ 本文の例をあげれば、Sievers 1892, S.14, Prologus, 4に付けられた *thū gilerit - uuâr zrs* は Masser 1994, S.65, Zeile 15 の古高ドイツ語 *thū gilerit bist uuâr* の行と完全に一致している。Sievers 1892, S.15 のラテン語 *uidens - eum zrs* もそうである。Masser 1994, S.67: *uidens. & timor Inruit super eum*. これらの行に関わる注は第二版で入れられた。

文献

- Baesecke, Georg: Hrabans Isidorglossierung, Walahfrid Strabus und das althochdeutsche Schrifttum. (zuerst in: ZDA 58, 1921) In: Kleinere Schriften zur althochdeutschen Sprache und Literatur. Hrsg. von Werner Schröter. Franke. 1-37, 1966.
- Baesecke, Georg: Die Überlieferung des althochdeutschen Tatian. Max Niemeyer Verlag, Halle (Saale), 1948.
- Baumstark, Anton: Die Vorlage des althochdeutschen Tatian. Herausgegeben, überarbeitet, mit Vorwort und Anmerkungen versehen von Johannes Rathofer. Niederdeutsche Studien Band 12. Böhlau, 1964.
- Braune, Wilhelm: Althochdeutsche Grammatik. 13. Auflage. Bearbeitet von Hans Eggers. (=Braune/Eggers) Max Niemeyer, 1975.
- Betten, Anne: Zur Satzverknüpfung im althochdeutschen Tatian. Textsyntaktische Betrachtungen zum Konnektor *thô* und seinen lateinischen Entsprechungen. In: Althochdeutsch. In Verbindung mit Herbert Kolb, Klaus Matzel, Karl Stackmann. Hrsg. von Rolf Bergmann, Heinrich Tiefenbach, Lothar Voetz. Band 1. Grammatik, Glossen und Texte. 395-407, 1987.
- de Boor, Helmut: Die deutsche Literatur von Karl dem Großen bis zum Beginn der höfischen Dichtung 770-1170. 7. Aufl. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1949.
- Ehrismann, Gustav: Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters. Erster Teil. Die althochdeutsche Literatur. 2. Auflage. C. B. Beck, 1933. Unveränderter Nachdruck 1966.
- Flöer, Michael: *Altêr uuîn in niuuen belgin*. Studien zur Oxforder Lateinisch-althochdeutscher Tatianabschrift. Studien zum Althochdeutschen Band 36. Vandenhoeck & Ruprecht, 1999.
- Ganz, Peter: Ms. Junius 13 und die althochdeutsche Tatianübersetzung. In: PBB 91. 28-76, 1969.
- Haubrichs, Wolfgang: Geschichte der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Beginn der Neuzeit. Hrsg. von Joachim Heinzle. Band 1: Von den Anfängen zum hohen Mittelalter. Teil 1: Die Anfänge: Versuch

- volkssprachlicher Schriftlichkeit im frühen Mittelalter. (ca. 700 - 1050/60). Athenäum Verlag, 1988.
- Hörner, Petra: Zweisträngige Traditionen der Evangelienharmonie. Harmonisierung durch den Tatian und Entharmonisierung durch Georg Kreckwitz u.a. Olms, 2000.
- Kapfhammer, Gerald: Die Evangelienharmonie ‚Tatian‘. Studien zum Codex Sangallensis 56. Dissertation. Köln, 2014. kups.ub.uni-koeln.de/5504/1/Gerald_Kapfhammer_Dissertation_Tatian.pdf
- Köbler, Gerhard: Verzeichnis der Übersetzungsgleichungen des althochdeutschen Tatian. Göttinger Studien zur Rechtsgeschichte. Musterschmidt-Verlag, 1971.
- Köhler, Friedrich: Lateinisch-althochdeutsches Glossar zur Tatian-übersetzung als Ergänzung zur Sievers' althochdeutschem Tatian-glossar. Unveränderter Nachdruck. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt, 1962.
- Martin, Thomas: Gelehrte Bildung in Fulda. Das Kloster als mittelalterliches Bildungszentrum 744-1571. Privatdruck, 2000.
- Masser, Achim: Der handschriftliche Befund und seine literarhistorische Auswertung. In: Probleme der Edition althochdeutscher Texte. Hrsg. von Rolf Bergmann, Vandenhoeck & Ruprecht, 124-134, 1993.
- Masser, Achim (Hrsg.): Die lateinisch-althochdeutsche Tatianbilingue Stiftsbibliothek St. Gallen Cod. 56. Studien zum Althochdeutschen. Band 25. Vandenhoeck & Ruprecht, 1994.
- Masser, Achim: ‚Tatian‘ In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Hrsg. von Burghart Wachinger et. al. Band 9. 619-628, 1995.
- Masser, Achim: Syntaxprobleme im althochdeutschen Tatian. In: Semantik der syntaktischen Beziehungen. Akten des Pariser Kolloquiums zur Erforschung des Althochdeutschen 1994. Hrsg. von Yvon Desportes. Universitätsverlag C. Winter. 123-140, 1997.
- Meineke, Eckhard / Schwerdt, Judith: Einführung in das Althochdeutsche. UTB 2167. Ferdinand Schöningh, 2001.
- Petersen, William L.: Tatian's Diatessaron. Its Creation, Disseminations,

- Significance, and History in Scholarship. Society of Biblical Literature Atlanta. 1994.
- Ranke, Ernst: Codex Fuldensis. Novum Testamentum latine interprete Hieronymo ex manuscripto Victoris Capuani edidit, prolegomenis introduxit, commentariis adornavit Ernestus Ranke. Marburgi et Lipsiae 1868.
- Rathofer, Johannes: Anton Baumstark. Die Vorlage des althochdeutschen Tatian. Vorwort des Herausgebers. Die gegenwärtige Problemlage. Konsequenzen für die Verfasserfrage. Zum Problem der Heliandvorlage. Manuskript und Neufassung. In: Baumstark, Anton: Die Vorlage des althochdeutschen Tatian. S.VI-XXVII. 1964.
- Rathofer, Johannes: ‚Tatian‘ und Fulda. Die St. Galler Handschrift und der Victor-Codex. In: Zeiten und Formen in Sprache und Dichtung. Festschrift für Fritz Tschirch zum 70. Geburtstag. 337-356, 1972.
- Rathofer, Johannes: Die Einwirkung des fuldischen Evangelientextes auf den althochdeutschen Tatian. Abkehr von der Methode der Diatessaronforschung. In: Literatur und Sprache im europäischen Mittelalter. Festschrift für Kalr Langosch zum 70. Geburtstag. 256-308, 1973a.
- Rathofer, Johannes: Ms. Junius 13 und die verschollene Tatian-Hs. B. Präliminarien zur Überlieferungsgeschichte des ahd. Tatian. Josef Quint zum 75. Geburtstag. In: PBB 95. 13-125, 1973b.
- Schmeller, Johann Andreas: Ammoni Alexandrini quae et Tatinai dicitur Harmoia Evangeliorum in linguam latinam et inde ante annos mille in francicam translata. Wien 1841.
- Schrot, Richard: Althochdeutsche Grammatik II. Syntax. Max Niemeyer, 2004.
- Schützeichel, Rudolf: Althochdeutsches Wörterbuch. Max Niemeyer, 1969.
- Schützeichel, Rudolf: Althochdeutsches Wörterbuch. 5., überarbeitete und erweiterte Auflage. Max Niemeyer, 1995.
- Sievers, Eduard: Untersuchungen über Tatian. Dissertation. Leipzig 1870.
- Sievers, Eduard (Hrsg.): Tatian. Lateinisch und altdeutsch mit ausführlichem Glossar. Erste Ausgabe. Ferdinand Schöningh, 1872.
- Sievers, Eduard (Hrsg.): Tatian. Lateinisch und altdeutsch mit ausführ-

lichem Glossar. Zweite neubearbeitete Ausgabe 1892. Ferdinand
Schöningh. Unveränderter Nachdruck. 1960.

Sonderegger, Stefan: Althochdeutsche Sprache und Literatur. (1. Aufl. 1974)
3. Aufl. de Gruyter Studienbuch, 2003.

Steinmeyer, Elias: Besprechung vn E. Sievers, Tatian. Lateinisch und
altdeutsch. In: ZDPb 4. 473-478, 1873.

Wissmann, Wilhelm: Zum althochdeutschen Tatian. In: Indogermanica.
Festschrift für Wolfgang Krause zum 65. Geburtstage am 18.
September 1960. Carl Winter. 249-267, 1960.